

【研究ノート】

河合俊雄著『謎とき村上春樹——「夢分析」から見える物語の世界』解説

山田 栄官

(一橋大学大学院言語社会研究科修了)

凡例

本稿を記すにあたって、河合俊雄著『謎とき村上春樹——「夢分析」から見える物語の世界』(新潮社、2025年)を参照する。この文献から直接引用を行う際には、丸括弧内にアラビア数字と「頁」という表記を用いてページ数を示す。

はじめに

本書では、著者の『村上春樹の「物語」—夢テキストとして読み解く—』(新潮社、2011年)において示された『1Q84』を中心とした考察をさらに発展させている。具体的には、前半部分で『スプートニクの恋人』や『アフターダーク』の考察を通して「ポストモダンの意識」(314頁等)のありようを示すことで、後半でそれらの作品とは異なる「『1Q84』という物語の独自性」(314頁)を示すことが意識化されている。本書の『謎とき村上春樹——「夢分析」から見える物語の世界』と、前著の『村上春樹の「物語」—夢テキストとして読み解く—』との目立った差異は見受けられないが、本書は、著者が提唱した「ポストモダンの意識」という概念を明瞭に意識化し、他作品との比較において『1Q84』の特徴をより相対的に把握している点に特徴がある。

第一章 物語と心理学

第一章の冒頭で著者は、村上春樹(以下、村上)の作品に対する研究上のアプローチやスタンスに言及している。具体的には、著者は村上作品を「心理学的に「解釈」」(21頁)することは不可能であると考えている。多くの村上作品では、心理学が問題とする「自我」(22頁)が重要な意味をもたず、その登場人物たちは「何の葛藤や抵抗もなく突然に異なる次元に入ってしまったたり、忽然と消えてしまったりする」(22頁)。精神分析は、無意識よりも「自我と無意識の接点で渦巻いてくる葛藤や抵抗」(22頁)を重要視するため、無意識の概念を表立って取り扱うことをしない村上作品に「心理学的解釈」(22頁)を適用させることは適切ではない。著者は「物語に心理学的な概念や理論を当てはめること」(27頁)をせず、「物語に内在的に関わっていくことが必要不可欠」(26頁)であると研究方法に関する見解を述べている。著者にとって「物語に内在的に関わる」とことは、「物語を未知のものとして受けとめ、その中に入っていく、物語の動きを一緒に行うこと」(28頁)を意味しており、村上の「生活史や経験、さらには作者のコメントだけから作品を説明しようという試み」(28頁)に疑義を唱えている。しかし、後に示すように、著者はユングの提唱し

た理論をもとにした『1Q84』の読解を提示しており、そうした著書の記述と著者の研究方法上のスタンスが両立しうるか疑問を抱いた。

第二章 自立と近代意識

『1Q84』に登場する多くの人物たちは、それまでの人生をどのように生きてきたか振り返って語られており、「これまでの生活史や記憶という時間」（39頁）が意識的に描かれている。そうした個人史に加えて、『1Q84』には、個人の人生「を超えたもっと長い時間の流れや歴史の厚みも組み込まれて」（40頁）おり、「向こう側とこちら側がつながっているようなプレモダンの世界や時間性がどのようなもので、それがどう現代と関係しているか」（40頁）という主題が追究されている。

著者は、『1Q84』における登場人物たちが10歳頃に、「自分で自分を意識するという自己意識が確立される」（44頁）ことで、「共同体や親からの自立の動き」（44頁）が生じていることに着目している¹。また、ユングが『自伝』で報告した「自分の自己意識が確立された体験」（46頁）にも言及し、「自己意識が確立され」る経験を通して、「親などに命じられたままに受動的に生きていたあり方を脱して」（47頁）、「自立が可能になる」（47頁）と述べている。さらに「十歳における自己意識の確立や自立」（53頁）は「これまでの前近代的なあり方から自分を解放」（54頁）するという意味合いもあることから、個人史に留まらず、「近代意識の確立という歴史的な変化」（53頁）とも関連付けて捉えている。「青豆と天吾の生き方や世界観」（54頁）は「近代意識を体現」（54頁）したものであり、両者とも「合理的で近代的な意識」（55頁）をもっている²。『1Q84』以外の作品においては、このような登場人物たちの「近代意識の確立」（56頁）という主題は扱われておらず、天吾や青豆のような、「親との葛藤と戦いを通じて、近代意識」（56頁）を獲得する登場人物たちのあり方に、「両親や共同体との戦いと、そこからの解放を描いている」（58頁）『1Q84』の特徴を見出している。「前近代の世界における親や共同体は、社会全体や、自然」（60頁）とのつながりをもつが、『1Q84』に登場する「証人会」（59頁）や「さきがけ」（59頁）という「社会につながっていかず、それと対立している閉じられた共同体」（59頁）は、「個人を包む一般的な親や共同体が既に存在していないということの意味している」（60頁）。そのため、「前近代の世界における親や共同体」が存在しない『1Q84』においては、「親子関係や共同体」（60頁）「からの解放を目指す近代意識」（60頁）は見られない。

¹ 証人会の布教活動に連れて行かれていた青豆は、10歳の時に「両親の元を離れ、母方の叔母の一家に逃れる」（42頁）。「NHKの職員であった父に、毎日曜日に集金と一緒に連れて行かれて、とても嫌な思いをしていた」（42頁）天吾は、10歳の時に受信料の集金に回ることをやめたいと父に宣言する。このように青豆と天吾はともに、「十歳のときに親から押しつけられるものを拒否し」（47頁）、「本当の自分の人生」（47頁）を開始するべく自立した行動を取るようになる。ほかにも、宗教団体「さきがけ」のリーダーの娘のふかえりがカルト集団から逃れて戎野先生のもとに逃れてきた年齢、「リーダーから性的虐待を受けていたつばさが、青豆に特殊な任務を与えている老婦人のセーフハウスに相談所から送られてきた」（42頁）年齢も10歳にあたる。10歳を迎えたタイミングで、登場人物たちの自立が図られるに伴い、「自分を対象として意識するようになる」（48頁）ことで「必然的に自己分裂、自己矛盾を生み出し、自分の中で葛藤を生じさせ」（48頁）、「大人と同じ神経症の症状」（48頁）を呈する場合があると指摘されている。

² 青豆は「極めて合理的で近代的な意識」（55頁）のもと、筋肉ストレッチングなどで身体を鍛えており、天吾は「極めて合理的なもの」（56頁）である数学を好んでいる。

第三章 解離と遭遇

河合隼雄が著した『泣き虫ハアちゃん』のハアちゃんの姿から、「親とのつながりを再確認したからこそ、親から分離し、自分を確立」(62頁)するという展開を読み取っている。さらに、発達心理学上の知見における個人という枠組みを超えた、社会的あるいは歴史的な観点からしても、「ギルド、教会、拡大家族などの共同体的なつながりを解体」(63頁)し、「近代意識の確立と個人主義を押し進め」(63頁)るにあたって、「パートナーの存在」(63頁)が重要な意味をもちうるということが指摘されている。また、個人の内面で生じるつながりに関しても以下のように言及されている。「近代意識の確立とは、自分で自分のことを考えたり、観察したりする自己関係ができることで、その意味では自分自身とつながること」(64頁)であり、「自然、家族、仲間などから分離することによって、新たにつながりを求める動きは、自分自身へのつながりや自分自身との関係に展開される」(64頁)ものである。「近代意識の特徴が、親、共同体、自然、時には祖霊などとの前近代的なつながりを断ち切って、個人となると同時に、新たなパートナーを見出してつながっていくものだとすると、青豆と天吾においては、つながるという要素」(69頁)が見られない³。

青豆と天吾のような、人間関係上「バラバラであることや孤独であること」(70頁)は、誰かと「つながろうという動きを生み出す」(70頁)ものであると指摘されている。現実のなかで孤独を感じ続けている状態から、対人関係におけるつながりを一定程度生み出していくために、青豆と大塚環、天吾と年上のガールフレンドという各々の関係が示すように、青豆と天吾は「直接的な性」(73頁)を求める方へと向かっていく。天吾は何らかの「責務」(75頁)を避けて生きており、「前近代からの縛りから解放された近代意識」(74頁)に付いてまわるはずの自分の判断や決定に対する「責任」(74頁)を負っていないという点で、彼は「近代意識の確立には至らなかった」(74頁)人物であるといえる。人妻のガールフレンドに対する天吾の関わりに「真のコミットや責任」(75頁)は発生していない。一方で青豆も「一人で生き、時々一夜だけの性的な出会いを楽しむ」(75頁)ような生き方をしていることから、彼女も対人関係における「責任を引き受けるのを避けようとしている」(75頁)といえる。青豆は「スポーツや身体」(77頁)に対する関心が強く、天吾は身体に加えて、数学や小説の執筆にも現実にもみずからを据えていくうえで重要な定点としての意味を見出している。青豆と天吾の生き方から伺える、人間同士の「つながらなさ」(78頁)は、「個人の中でのつながりのなさ」(78頁)、つまり「解離」(78頁)のような現象を表している⁴。「人と人とがつながらないこと、個人が解離していること」(79頁)の原因は、「1984年と区別された1Q84年という世界」(79頁)の現出に見られるような「世界自体の解離」(79頁)にある。「近代意識を体現」(80頁)しているとは言い難い青豆と天吾の意識のことを、筆者は「ポストモダンの意識」と呼んでいる。青豆と天吾には「分離からつながりへという動きが欠けて」(80頁)おり、一時的に生じるつながりは「性や暴力による偶発的なもので、連続性がない」(80頁)。近代意識は「個人を束縛してきたものとの戦いとそれからの解放によって特徴づけられて」(80頁)

³ 天吾に「密な関わりをした人や友人」(65頁)にあたる存在はいない。彼は「人間関係や恋愛関係をほとんど持っていないだけではなく、自分から相手やつながりを探し求めようという主体性が欠けている」(66頁)。青豆も、親友の大塚環が自殺したことで友人と呼べる存在はまったくいなくなり、天吾と同様に孤独な現実のなかに身を置いている。

⁴ 「自分と自分の関係というのが、必然的に二つの自分というのを前提にしているので、自分自身につながらなかつたり、自分自身に責任をもたなかつたりすると、いわゆる解離という現象」(64頁)が生じることがあると説明されている。

いるもので、心理学上の知見からすると「親や家族からの解放」（80頁）によって生じうるものである。「束縛と守りから解放されたゆえに、自分とつながり、またパートナーという存在を見つけることが重要である」（81頁）一方で、「ポストモダンの意識の特徴は、もはや解放されるために戦う相手を必要としないこと」（81頁）にあるといえる。

第四章 ポストモダンの意識

『スプートニクの恋人』との比較において、夏目漱石の『三四郎』を考察の題材としている。主人公の三四郎が、東京帝国大学入学で上京するために乗車した汽車のなかで出会った女性からの誘いに翻弄されつつも、その誘いに「最後まで応じ」（84頁）ることのないあり方に、著者は「前近代の世界と葛藤する近代意識」⁵（85頁）を見出している。三四郎にとって、「前近代のあり方」（85頁）とは、目の前の「女の誘いに迷いなく応じて性的な関係を持つことであり、それはまた故郷や共同体とつながること」（86頁）である⁶。三四郎は近代人たる意識をもっており、「今ここの目前のものや人に全てを賭けることはでき」（86頁）ず、汽車で出会った女と一夜の関係をもつことは「禁止」（86頁）すべきとの感覚を抱いている。三四郎には、近代意識に特徴的な「自分と自分の間の関係という自己反省的な感情や意識」（86頁）が働いており、「愛というのは、特定の相手への、変わらぬ、自分の全存在を賭けたものでなくてはならないというロマンチックラブ」（87頁）の意識から、汽車で出会った女との関係に「禁止」が生じる。『三四郎』と対比されている『スプートニクの恋人』には、男女の関係に「禁止」が介入することはなく、「期待、誘い、ためらいなどの局面」（88頁）や、「やりとりや駆け引きを伴った間接的なもの」（88頁）がまったくないなかで「いきなり二人が性的関係」（88頁）をもつに至る場面が書かれている。『スプートニクの恋人』に書かれている、「自分への責任というのと無縁」（89頁）である「ポストモダンの意識にとっての関係は、やりとりや駆け引きを伴った間接的なものではなくて、突然で直接的であることが大きな特徴」（88頁）であり、「あくまでも人間同士の間の身体的な関係にとどまっている」（90頁）ものである。

「前近代の存在のあり方が、共同体や自然、さらには死や超越を含む神話的世界に包まれていた」（91頁）一方で、「近代意識はそこから自分を切り離して独立させようとする」（91頁）ものである。親や共同体という「束縛するものからの解放という構造と物語」（91頁）をもっている「近代意識」は、「束縛するもの」と「戦うという形で、否定的にはあっても親や共同体にしがみつき、それらとまだつながっている」（91頁）。一方で、「ポストモダンの意識はもはや何かから解放される必要がなく、既に共同体から離脱してしまっ、バラバラになった存在や視点になって」（92頁）おり、そうした特徴は、『風の歌を聴け』や『羊をめぐる冒険』、『ノルウェイの森』などのような『ねじまき鳥クロニクル』以前の作品に顕著に表れている。また、青豆と天吾の他人との関わりの仕方に見られるように、「ポストモダンの意識」においては、「自分というものをどこかに担保とし

⁵ 「葛藤や罪悪感とは自分の中の対立する要素の間の対話や対決の結果であって、自己関係を特徴とする近代意識の現れ」（89頁）であり、「ポストモダンの意識には認められない」（91頁）ものである。

⁶ 著者は、「今ここの目前の相手と一緒にすることは、単なる性的な関係ではなくて、神や超越性につながる」（86頁）であり、「死者や超越性につながる通路があるというのは、前近代のあり方の重要な側面」（86頁）であると述べている。

て残っていて、自分の一部でしか相手に関わ」（97頁）らず、「自分が全てで関わっているつもりであっても、別の自分がどこか他のところにいる」（97頁）ものである。

青豆の行動や好みは、「全くの恣意性に陥ってしまわない歯止め」（98頁）の意味をもつ数字のように、「単なる一つの記号」（98頁）である。「近代意識は自己関係的」（99頁）で「相手に向うものは必ず自分に戻ってくる」（100頁）のに対して、「ポストモダンの意識」には自分に返る動きが見られず、「近代意識」に見られるような「自分、あるいは主体という強烈な定点」（100頁）が「ポストモダンの意識」には存在しない。「共同体的なものから自立した近代意識を打ち立てようとする」（104頁）ことで生じる、対人恐怖の事例が近年激減するなど「心理療法のパラダイム」（104頁）に揺らぎが生じている現代において、村上作品は、「葛藤、罪悪感、主体性などの近代意識の特徴」（104頁）をもたない「世界での新しい意識のあり方」（105頁）を表現している。

第五章 神話的世界とその喪失

村上作品が「近代意識の確立という課題をいつの間にか飛び越してポストモダンの意識に移行してしまった世界を描き出して」（106頁）おり、そこでは「前近代とポストモダンの意識の解離」（108頁）の発生が描かれている。『空気さなぎ』における「ある種の精霊のような存在」（110頁）であるリトル・ピープルは、「さきがけ」から逃れてきたつばさを通して、死の床につく天吾の父親を通して、最後には死んだ牛河を通して」（110頁）登場する存在である。「少女のつばさはやや例外であるけれども、そこには死んだ山羊、死の床につく天吾の父親、殺された牛河と、生け贄を通して、向こうの世界のものが現れて来ようという動きが感じられ」（110頁）、リトル・ピープルが示す「向こう側や超越性の世界とつながっていて、そこから何ものかがこちらの世界に現れてくる」（111頁）という現象に、「プレモダンの世界の特徴」（111頁）があると述べている。「さきがけ」のリーダーによると「古代の世界においては王たるものが〈声を聴くもの〉であって、地上に生きる人々の意識と、リトル・ピープルとを結ぶ回路」（112頁）であった。「元々はこちら側と向こう側の世界とはつながっていたのに、現代というのは、地上に生きている意識と、リトル・ピープルとの関係が切れてしまっている状況に他ならない」（112頁）とし、「人間関係のつながらなさや、個人のこころの中における解離」（112頁）は、「超越性や向こう側との関係が切れたことによる」（112頁）とする。「青豆と天吾がバラバラに孤独に生きているのは、人と人との間の、いわば水平的なつながりがない」（113頁）ためではなく、「超越性や向こう側との関係が喪失されたため」（113頁）であると強調されている。

村上作品において、「プレモダンの世界では存在していた向こう側はこちら側とのつながりを失い、それどころか喪失されているように」（122頁）描かれていることが多い。『空気さなぎ』に示される「イニシエーションの儀式」（122頁）や、「さきがけ」のリーダーが行った「向こう側と交流するための儀式」（122頁）は、「あまりにも異常に思える性や暴力によって特徴づけられて」（123頁）おり、このような「プレモダンの儀式が、もしも文字通りに実施されると、現代の世界においては犯罪」（122-123頁）と見なされる。『1Q84』における「さきがけ」のような「現代の世界において、前近代的なもの」（123頁）の体験を与えるような閉鎖的な共同体では、「メンバーに対する暴力的な強制や束縛」（123頁）が行われる場合がある。しかし、『1Q84』はそのような「プレモダンの噴出」（123頁）を単に批判するのではなく、「ポストモダンの意識にとって、超越性とは何

か、また逆に現実とは何かを問い直そうとしている」（124 頁）。『空気さなぎ』に登場する少女が、「十歳における自立という近代意識の確立を目指す」（125 頁）にあたって否定しようとした、「間違っただ」「正しくないもの」で「大きく歪んだもの」（125 頁）たるリトル・ピープルを「邪悪なもの」（126 頁）と見なすのは「近代意識の視点」（126 頁）を通しての点であり、それと異なる視点で捉えた場合に「邪悪なもの」とはいえない可能性があるという点に、『1Q84』における思わぬ反転の可能性が秘められている」（126 頁）。

第六章 超越の反転と結婚の四位一体性

現代では犯罪となるが、「プレモダンの世界観」（132 頁）では、「殺すことこそ最高の愛であり、愛は殺すこと」（132 頁）を意味していた。実際、『1Q84』において示される青豆の行動には「殺害と性的な関係を持つことの連関」（130 頁）があり、「殺害と性的な関係」は「青豆においては同じ事象の両面のようにになっている」（130 頁）。天吾も、彼の母親がその恋人に殺害されており、青豆と同様に「愛と殺害とが錯綜する世界との関わりを持っている」（132 頁）人物である。さらに青豆も天吾も、「決まったパートナーを持つとしない」（133 頁）点が共通しており、彼らの特定の「愛の対象は存在」（133 頁）せず、「それへの自分のコミットもはっきりとしない」（133 頁）。「自分にも相手にも定点を持たずに流れていく、ポストモダンの意識」（133 頁）をもっている彼らであるが、物語の進行と共に、「絶対の愛を密かに持っている」（133 頁）ことが明瞭になっていく。作品の後半に向かうにつれて次第に表出される、「絶対的な愛の対象が存在するロマンチックラブ」（133 頁）が、作品の前半においては見られないことが『1Q84』の特徴であり、その事実は村上作品において「近代意識」が描かれていない「証拠」（134 頁）である。「理想とするものと現実とは区別され、あるいは解離していて、理想の愛は最初から不可能なものとして断念されて」（134 頁）おり、「定位されるポイントは存在するけれども、それは最初から不在であり、あきらめられていて、「私」の主体的なコミットがない」（135 頁）のである。

青豆と天吾の関係は直接的に発展するのではなく、「「さきがけ」のリーダーとふかえりに媒介されることによってたらされる」（137-138 頁）ものである。青豆とリーダー、ふかえりと天吾の関係を考えるために、まずリーダーとふかえりの関係を確認する。リーダーとふかえりは「性的関係を通じて、神の声がこの世に到来する」（139 頁）という「聖なる関係」（139 頁）にあり、リトル・ピープルの声を耳にすることで「超越性からのメッセージを受け取る」（139 頁）という儀式を行う。しかし現実的に、彼らが性的な関係をもっていることは、「近親相姦にしか過ぎず、また自分の欲望のために少女たちを搾取している性的虐待や犯罪とみなされる」（139 頁）はずの事態である。ところが、「リーダーとふかえりの関係は宗教儀式的なもので、そこには全く違った次元でのリアリティや意味がある」（139 頁）ということが、青豆がリーダーを殺す際に、リーダーの口から明かされる。「これまではリーダーのことを許し難い性的な犯罪者であり、ペテン師であるとみなしていたのに、リーダーを殺そうとして青豆が本当にコミットしていったためにこそ、それが単なる犯罪や身勝手な利用でなかったことが逆に明らかになる」（140 頁）という事態が生じる。

以上のような、リーダーとふかえり、そして青豆と天吾という 4 者の関係を「ユングによる結婚の四位一体性」（142 頁）の概念を援用しながら考察している。「ユングは、カップルにおいて、現実の意識的な男女の関係だけでなく、そこにそれぞれが持つ無意識的な異性像が関係してくると考

えた。つまり、男性にはアニマと言われる女性像、女性にはアニムスという男性像がそれぞれ存在する。そして恋愛関係においてアニマ像、アニムス像は相手に投影される」（142頁）という。「後期のユングは錬金術に傾倒して、むしろ個人を超えた世界のこと、超越性そのものを問題にして」（142頁）おり、「結合の問題」（142頁）を「人格の統合としてではなくて、錬金術の様々な表象における結合と分離として」（142頁）捉えている。「錬金術で目指されるのは、錬金術師と女性の助手の間の人間の結合でなく、王と王妃の結合」（142頁）であり、「人間のレベルではなくて、神のレベル、超越のレベルでの結合」（142頁）が重要視される。

青豆がリーダーを殺害する際に筋肉ストレッチを施したことで、「リーダーがいかに忍耐強く、強靱な精神力を持っているかが青豆に実感され」（144頁）、その交流は「性的な交わりに等しいものであった」（144頁）。天吾の方は、ふかえりが書いた『空気さなぎ』を書き直すことを通じてふかえりと「既に交わって」（145頁）おり、ある雷の夜に、「青豆がリーダーを殺害して「あちら側」に送るのと同時に」（145頁）、「オハライ」の儀式として「ふかえりと交わって射精する」（145頁）に至る。「青豆がリーダーを殺すことと、ふかえりと天吾とが交わることが同時に生じ」（145頁）ていることは、「一つの密儀が違う場所で別々に行われた」（145頁）ことを意味しており、「超越的なものとのリアルな出会い」（145頁）が生じる契機とされている。このような「プレモダンの儀式のポストモダンの行われ方」（145頁）が書かれていることが『1Q84』の特徴である。

第七章 人間の愛と物語——心理学的差異

「青豆とリーダー、天吾とふかえりの関係は、殺害と性的行為という全く異なる表現をとっているとはいえ、その神聖なカップルから派生してきている超越性との真の出会い」（150頁）を意味している。「青豆とリーダー、天吾とふかえりという、超越性との交差する関係を切り、いわば現実への帰還という次のステップを助けるものとして」（152頁）、「青豆と天吾の間の排他的な人間の愛」（152頁）が書かれている。青豆とリーダー、ふかえりと天吾という「四位一体性」に見られる「超越性との交差した関係」（154頁）において、「青豆と天吾との間の排他的な関係」（154頁）が生じる。ユングは『転移の心理学』で、「「薔薇園」という王と王妃の関係を描いている錬金術の図像を用いて、個人を超えた向こう側での結合について論じ」（155頁）ている。ギーゲリッヒが提唱した「人間と魂の区別」（154頁）を示す「心理学的差異」（154頁）は、「人間的なものと区別された魂の次元を際立たせるための概念」（155頁）である。「青豆と天吾が、お互いの関係を最初は生きられなかったのは、まさに相手を超越の位置に置いていて、人間の男女の関係のことと超越性との関係が混同されていたから」（155頁）であり、「超越性との関係をリーダーとふかえりとの交差した関係という別の形でくぐることによって、それとは区別されて人間同士の関係を生きることが可能になった」（155頁）という。「天吾とふかえり、青豆とリーダーの関係が、錬金術師と王妃、助手である神秘の妹と王の関係であったのに対して、天吾と青豆の関係は、錬金術師と女性の助手との間の人間同士の関係に回帰」（156頁）していく。

リーダーによれば、「天吾という具体的な一人の男性に向けられた青豆の絶対的な愛」（156頁）は「宗教そのもの」（156頁）で「超越的なことに関わるもの」（156頁）であることから、「現実の人間に対する愛」（156頁）とは異なる。青豆と天吾が両者ともに超越的な存在を媒介として現実的な関係を構築していくうえで、「青豆の妊娠した子ども」（157頁）の存在と、青豆と天吾が想像上

の関係ではない「実際の関係」（157頁）を構築することが重要な意味を帯びる。後者に関して、「超越性との関係を持つために、結婚の四位一体性という仲介が必要であったように、現実のつながりを作るためにも仲介者という第三項」（157頁）にあたる、牛河の役割が不可欠である。牛河は、青豆と天吾の「二人を実際に仲介する第三項」（158頁）として、青豆と天吾を結びつける役割を果たしている。例えば、青豆と天吾の過去の「具体的な事実」（157頁）が「牛河の調査の記述を通じてはじめて明らかになる」（157頁）こと、「青豆のかくまわれていたマンションから見える公園」（158頁）の滑り台にいた牛河を青豆が尾行することで天吾のアパートに辿り着くことなどが挙げられる。このような青豆と天吾の「愛の仲介者の役目」（160頁）を済ませた後に、牛河は殺されてしまう。

青豆はリーダーを、天吾はふかえりを媒介として「超越性との関係」を経由し、次第にそうした超越性を排除していくなかで、青豆が「実際に子どもを妊娠するという現実的」（161頁）なできごとが生じる。一方で、『スプートニクの恋人』や『国境の南、太陽の西』、『海辺のカフカ』、『ノルウェイの森』といった作品において、「恋愛が成就せず、常に別れや喪失で終わってしまうのは、あの世とのつながりがあったプレモダンの世界の喪失」（162頁）を意味しており、「向こう側の世界が実際の死によって隔てられる」（162頁）事態を示している。「超越性との関係に囚われていたり、超越性と人間の関係の混同があったりするからこそ、人間同士の関係は生じてこない」（162頁）のであり、それらの作品においては『1Q84』におけるような心理学的差異が成立していない」（162頁）といえる。

第八章 超越性の排除となごり

「青豆と天吾とが結ばれるためには、超越性とのつながりが回復されることが必要」（170頁）であり、「雷鳴の中での青豆とリーダー、天吾とふかえりが交差した四者の交わり」（170頁）のような「超越性との邂逅」（170頁）を経て生じた青豆と天吾の関係も、「その実現に向けて超越性を再び排除」（170頁）していく。青豆と天吾が小学校の頃以来の再会を果たした後、「高速道路の非常階段を、逆に上ることによって、元の世界に戻り、もはや月が二つになっていない」（172頁）ことを確認することは、「結局は元のさやに戻ってしまうという超越性のなさや消滅を示唆している」（172頁）という。しかし、『1Q84』BOOK3で「超越性」を感じさせるものが改めて登場し、「青豆のお腹の中の赤ちゃん」（173頁）を、青豆と天吾にとっての「第三項」（173頁）と見なし、「人間的な愛から排除された、超越性を担っている第三項」（174頁）と捉えている。

牛河が「超越性との関係」（179頁）を媒介する存在として、「青豆と天吾の仲介役となり、想像上のものにしか過ぎなかった二人の関係を現実にもたらず役目を果たす」（179頁）にあたって、「牛河とふかえりが魂の関係」（180頁）に移行していることが指摘されている。「牛河とふかえりの出会いが超越性への通路を開いたように、それは超越性とのつながりが大切なプレモダンのなものでありながら、カメラのファインダーごしに覗き込むという極めて現代的、それどころかポストモダンの形を取っている」（181頁）こと、及び神話における「鏡」（181頁）とは、本来であれば「見てはならない」（181頁）「聖なるものやあの世のもの」（181頁）を見るためのものであることから、牛河は、「カメラのファインダー」という「直接的ではない仕方で、ふかえりという聖なる存在に出会っている」（181頁）。「牛河はリトル・ピープルの通路になり、また『1Q84』のBOOK3で消えてしまっていた『空気さなぎ』の物語を、実際に復活させる」（182頁）存在であり、「いつ

の間にか青豆と天吾との間の人間の愛から排除されてしまったふかえりと、聖なるカップルをなした牛河こそ聖なる殉教者であり、超越性を担っている」(182-183頁)という。ユングの提唱した「四位一体性」という概念と対比的に取り上げられている、フロイトの提唱したエディプス・コンプレックス(「子どもからすると母親との二者関係にそれを禁止する父親が入ってくるというもの」(183頁))の理論に着目しながら、ルネ・ジラルールが『欲望の現象学』のなかで述べている、「ロマンチックラブというのが、主体が自ら選んで対象を求めようというものであるのに対して、それは虚構であって、愛や欲望には常に媒介者という第三者が存在するというのが真実」(184頁)という言葉にも言及し、「第三者」が存在することの重要性を補足している。

第九章 存在の逆転

第九章において改めて、ユングのいう「四位一体性」という概念をもとに『1Q84』を読解する試みとして、「ふかえりとリーダーという聖なるカップルから出発していて、そこに青豆と天吾が交差して聖なるものをつなぎ、さらにいわば聖なるものから別れていくことによって、青豆と天吾との間の人間としての愛が成立する」(192頁)という流れを確認している。「リーダーと娘のふかえりの関係が儀式としての聖なる交わりであったことが明らかになる」(193頁)点が、「この長編小説における最大の転回点であり、まさに聖なる次元が本当のものとして現われてくる瞬間である」(193頁)と指摘している。「ユングの結合の考え方が、人間の男女の関係から出発して超越の次元での結合に至り、そこでいわば終着点を迎えているのに対して、『1Q84』ではこれまでの理解が反転して聖なる次元が認められたときにはじめて聖なる結合が現れ、それがいわば人間の世界に流出してくることによって、最終的に人間同士の愛に至る」(194頁)という展開が書かれている。「ユングが人間から出発して超越や聖なる次元に至っているのに対して、『1Q84』では逆に聖なるものからはじまって、人間の世界に至っている。つまり『1Q84』における愛の出発点は人間や個人の側にはなくて、神や超越の側にある」(194頁)のである。

第一章で言及されたように、『1Q84』は「登場人物の過去が詳しく描かれている」(203頁)点に特徴がある。家族や「自分の引きずる過去」(203頁)が、「近代意識」に見られる自立を妨げる一方で、「ポストモダンの意識は、極端な場合には何の関係も過去も持たずに、ポツンと存在しているだけに、性や暴力の形で思わぬものと邂逅するはず」(203頁)であるが、「しかしそこから現実に降り立つためには、過去を持つことが重要」(203頁)である。「ポストモダンの意識には元々解放されるべき過去がない」(205頁)のである。

青豆が「身に染みついているお祈りのことばを唱える」(207頁)ことは、「証人会の人々が信じているあり方とは全く異なる」(207頁)が、そうした仕草からは「やはり超越が、神が現前しているのがかすかに感じられる」(207頁)といえる。「青豆も天吾も雷鳴の中でまるで恩寵のようにそれぞれに聖なるものにふれ、合一を体験したことで実現した」(209-210頁)。『1Q84』では「あるいは大胆に言うとポストモダンの意識では、元々の現実がないので、超越にふれたことによって現実がはじめて発見され、肯定されることになる」(211頁)。

第十章 再び物語へ

『1Q84』は「雷雨の中での青豆、リーダー、ふかえり、天吾の四人が交錯する出会いという頂点」

(213 頁) が描かれた後、「青豆と天吾との再会、非常階段を逆に上って高速道路に到ること」(213 頁) によって「超越から現実への帰還」(213 頁) が果たされる作品である。第十章では、このような「現実への帰還」に呼応して、「「さきがけ」の秘密を公に」(215 頁) することで、教団が「超越性との関係を失」(215 頁) っていく契機となった『空気さなぎ』という「魂の物語」(215 頁) が消滅している事態に着目し、この作品は「物語の成就とも、物語の隠蔽とも考えられる」(216 頁) と指摘している。ふかえりの「ほぼ実体験に基づくと考えられる」(214 頁) 『空気さなぎ』の物語において、主人公の少女が世話を失念したことで死なせてしまった、「いちばん年老いた目の見えない山羊」(216 頁) は「生け贄」(216 頁) であり、その「死んだ山羊の口からリトル・ピープルと呼ばれる向こうの世界の存在がこちらに現われきて、交流」(216 頁) を行っていることが示すように、少女が「罰として「集まり」から十日間隔離」(216 頁) されたことは、彼女が「向こうの世界の存在とつながるための儀式であり、またそれを通じてのイニシエーション」(216 頁) である。また、「少女が十歳という、子どもから大人になろうという年齢を迎えている」(216 頁) ことも、このようにイニシエーションという意味を見出すことの正当性を担保している。『空気さなぎ』が、ふかえりの「実体験」に基づきながら、「儀式的な形でのあっち側の世界とのつながりを描いている」(219 頁) ように、「物語こそがこっち側とあっち側を結びつけ、また儀式が担ってきたそのような役割を物語が引き継ぐようになっている」(219 頁)。『1Q84』の物語内物語としては『空気さなぎ』以外に、「向こう側の世界を象徴する」(221 頁) 意味をもつ「猫の町」という物語も挙げられる。『1Q84』においては、『平家物語』やチャーホフの『サハリン島』、『マクベス』、アイザック・ディナーセンの『アフリカの日々』などの多くの物語からの引用が行われており、そうした事実は、「オリジナルというかけがえのなさの失われた」(222 頁)、「コピーだけが繰り返されていく」(222 頁) 「ポストモダン的な状況に沿っている」(222 頁) といえる。

村上作品の特徴として、「短編の集まりで長編が成り立っているだけではなくて、むしろ物語の中に物語があり、また全体の物語よりも、手紙などの形で読者に示される物語の方が、奥にある、深層から浮かび上がってきた物語」(224 頁) であるという点が挙げられる。本来であれば、「共同体全体に語られ、共有されないといけない」(225 頁) 「大きな夢」(225 頁) に対して、「個々人の見る普通の夢は小さな夢」(225 頁) であって、「個人の小さな物語」(225 頁) は共同体に語られる必要」(225 頁) がないものである。一方、村上作品では、「誰にも共有されている大きな物語」(226 頁) と『空気さなぎ』に代表されるような小さな物語」(226 頁) との関係が「完全に反転している」(226 頁)。『空気さなぎ』が「プレモダンな世界や、超越的なものを感じさせ」(226 頁) る物語として書かれており、そのことは、村上作品が「歴史的に生じてきた内面化を映し出している」(227 頁) ことの表れである。現代においては、次第に人間の「内面化の動きに相応して、外の大きな物語としての神話や儀式は消滅して」(227 頁) おり、「個人の内面にしか残っていない」(227 頁) 物語は「共同体で共有する必要」(227 頁) がない。ユングが指摘しているように、「個々人の夢に、古代からの神話や儀式が現われ」(227 頁)、個人の「小さな物語」を形成する。『1Q84』において「超越的なものを伝え、こっち側とあっち側をつなぐ」(228-229 頁) 役割を担う『空気さなぎ』は、実際に刊行され「世の中に出たからこそ、あっち側との関係を途絶えさせるような働き」(229 頁) も担っている。『1Q84』は、「プレモダンの世界」から立ち上がる物語が「死の世界や超越の世界」(229 頁) を提示することと、「死の世界や超越の世界」との関係が断絶されることの「両

面を自覚的に描き出している作品である」(229頁)。未完の『空気さなぎ』は「天吾によって違う物語として完成されるのを待っているのかもしれない」(231頁)ず、「生まれてくる子どもと同じくらいに、これから完成される物語が大切であり、護っていかねばならないこと」(231頁)を示唆する青豆と天吾の会話を通して、「誕生を待つ子どもと小説の将来をオープン」(231頁)にした結末が示されている。

第十一章 村上春樹におけるインターフェイスとしての夢

『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』は、「これまでの作品のような向こう側の世界や非現実の世界が描かれていないところが特徴的」(232頁)であり、この作品を通して、「超越性や異世界性が失われるとともに、ここはオープンシステムから近代意識に特有なクローズドシステム」(235頁)に移行している。多崎つくるとは、高校時代から特別親しかった5人グループから突然拒絶された経験から、切迫した希死念慮を抱いている時期がしばらく続いた。しかし、夢のなかでありありと嫉妬を感じたというできごとを契機として、現実において死の想念へと傾斜することに歯止めがかかるようになる。「自分の中に核が生まれ、感じている自分との関係、つまり自己関係が生じる」(235頁)というあり方は、「クローズドシステムとしての近代意識」(235頁)の特徴である。高校時代の親友たちから絶縁を申し渡されて16年が経過した後、多崎つくるとは恋人の沙羅に導かれ、親しかったグループから「排除された原因」(236頁)を知るために同級生のもとを訪れる。その巡礼において、当時精神状態が不安定であったシロが多崎つくるとによって「強姦されたと訴えた」(236頁)ことが絶縁の原因であったことが明らかとなる。ほかの友人たちはそうしたシロの主張に懐疑的な視点をもっていたが、「シロの状態があまりにも不安定であった」(236頁)ことから、シロのところが立ち上げたはずの強姦というできごとが実際にあったと認めざるを得なかった。シロがこころの中で感じてやまなかった強姦の被害による苦しみと同様に、親しかったグループからの突然の追放を受けた多崎つくるとが抱えた苦しみは、「あくまで彼個人のこころにおける苦しみ」(236頁)であり、心理療法はまさにこのような「クローズドシステムとしてのこころに基づいている」(237頁)ものである。この作品では、多崎つくるとにとっての「完全なる世界の喪失というトラウマ体験が、孤独であることの原因」(237頁)として書かれており、心理療法はこのような孤独に「閉じられたこころ」(237頁)が作り出す「歴史を解きほぐすことで治療を進めようと試みる」(237頁)ものである。

親友たちから排除されたことによる精神的な打撃から立ち直り始めた頃、多崎つくるとが見た「夢とも思われない夢」(238頁)において灰田が登場した場面などが示すように、夢が現実と交錯し、イメージーションがインターフェイスとしてつながるありようが書かれている。エレンベルガーが『無意識の発見』で報告しているように、「前近代における癒しの技法においては、治療の対象となる当人だけでなく、家族や住民の多くが参加しての儀式になるのに対して、近代の心理療法は基本的に個人との契約」(240頁)のうえでクライアントだけと会い対話を重ねることを重視するものであり、心理療法においては、夢やイメージーションも「本人のこころの中のもの象徴的表現」(240頁)として捉えられる。さらに、ユングは、イメージーションや夢が「インターフェイス的な働きをして、現実と直接つながることがある」(240頁)と指摘している。ユングの『赤の書』という著書は、「夢やヴィジョンに登場した人物を後から意図的に想起して、それとの対話をした

ものの記録」(240頁)である。この著書において用いられている、アクティヴ・イマジネーションと呼ばれる「夢や描画などのイメージを用いた技法」(240頁)において、「現実の人間を思い浮かべて対話するイマジネーションは禁止されている」(240頁)。ユングが「アクティヴ・イマジネーションにおいて思い浮かべて対話すること」(241頁)を危険な行為と捉え、それを禁止していたことから、イマジネーションは「自分のところの中だけに収まらずに、インターフェイス的なものとしてそこに登場する他者にも影響を及ぼす」(241頁)ものとして想定されているといえる。夢やイマジネーションにおけるインターフェイス的な機能は、身体に強く関与するものであると著者は考えている。

第十二章 色彩を持たない多崎つくるの現実への巡礼

『色彩を持たない多崎つくと、彼の巡礼の年』とそれ以前の村上作品との違いとして、「以前の作品では、遭遇が現実での性や暴力につながっていくのに対して、ここでは関係が完全にイマジネーションの中で生じる」(252頁)こと、「以前の遭遇の仕方が無作為であったり、プレモダンなのが噴出してきたりするあり方であったのに、この作品ではそうでない」(253頁)ことが挙げられる。『1Q84』における「リーダーとふかえりという近親相姦のカップル」(257頁)という「彼岸における結合」(257頁)から「雷雨におけるリーダーと青豆、ふかえりと天吾という交差した関係をへて、青豆と天吾との間の、現実における人間の愛」(257頁)に邂逅するという展開は、ユングの提唱する「結婚の四位一体性」と逆の方向付けである。こうした「四位一体性の図式」(257頁)は、この作品には当てはまらない。むしろこの作品では、「一度内面化されたものから、いかに外に出て行くか、その際に灰田と沙羅という導き手との粹破りの関係が問題になっている」(257頁)。沙羅の助言に促された巡礼において、多崎つくるは、「高校時代に楽園として作り出していたもの」(261頁)から突然拒絶された経験を、「過去のある時点に存在したものとして内面化」(261頁)するのではなく、「喪失されたものとして真に内面化」(261頁)するようになった。

『1Q84』においては、「雷雨の夜に青豆はリーダーと、天吾はふかえりとつながるという超越性との邂逅があってから超越的世界を去ることによって」(262-263頁)成立した、「青豆と天吾との間の現実の恋愛」(263頁)が書かれている。その一方で、『色彩を持たない多崎つくと、彼の巡礼の年』においては、「もう一度過去の理想のグループと向き合」(263頁)い、「内的世界の過去に作られた理想の場所」(263頁)を真に喪失したと確認することが「現実との出会い」(262-263頁)につながっていくありようが書かれている。『1Q84』では二世界的に、プレモダン的な世界の粹組み」(263頁)において「超越性との真の出会いとそこからの分離による現実への降下が同時に成立」(263頁)している一方で、『色彩を持たない多崎つくと、彼の巡礼の年』では「喪失が内面化された近代人の形で」(263頁)、「内的な理想の成立と、その喪失による現実との出会いが同時に成立している」(263頁)。『色彩を持たない多崎つくと、彼の巡礼の年』においては、多崎つくるの「導き手」(263頁)の役割を果たす沙羅へのコミットメントが示されており、そのコミットメントは「暴力的な、ひとりよがりなもの」(264頁)ではなく「他者の存在や意志を認める」(264頁)ものとして表現されている。

第十三章 『騎士団長殺し』における絵画の鎮魂とリアリティ

『騎士団長殺し』においては、「騎士団長殺し」の絵、免色の肖像画、秋川まりえの肖像画、白いスバル・フォレスターの男の絵、祠の裏の塚の穴の絵のように複数の絵画作品が登場している。「絵画という表現手段が多義的」(267頁)であるのみならず、この作品における絵画は意識的に「完成されない」(267頁)ものとして登場する曖昧なものである。この作品における主人公の「私」(267頁等)は、「妻との間だけでなく、他の人に対しても本質的なつながりを持っていない、あるいはそれを避けているよう」(269頁)に映る人物である。「私」は「徹底的に顧客を満足させるために絵を描いて」(269頁)おり、「モデルである相手に対する真剣な関わり」(269頁)をもたず「自分の本質的な芸術的欲求に迫ろうというものがない」(269頁)人物である。「クライアントへの水平的な関係の弱さは、自分の芸術的本質や源泉へのコミットのなさ」(269-270頁)という「垂直的な次元の欠如と関連している」(270頁)。免色が「私」に肖像画の制作を依頼して数日が経過した後、鈴の音に導かれて辿り着いた、雑木林のなかの祠の裏にある穴は、死や異界へと通じており、「私」に「心臓に先天性の欠陥があるために常に死に直面していて、実際に十二歳で亡くなった大切な妹との思い出」(271頁)を喚起するものである。この穴との邂逅を通じて「私」は自身の問題と向き合い、やがてそれを克服することで、妹や妻へとつながることが可能となる。この穴の存在を共有し、実際にそのなかへと入ったのは、「私」、免色、秋川まりえの3人のみであり、穴という次元を通して彼ら3人のあいだには深い次元でのつながりが生じている。

『騎士団長殺し』では、「主人公と妻の関係を現実の関係とし、妹の小径を聖なる世界や無意識に位置づけられるものとする」と、それと対をなすものが存在」(273-274頁)せず、「第三者となるひとが何人も存在し、関係の網の目」(274頁)が広範囲に及んでいるという特徴がある。免色の場合も、「絶対的な対象とペアをなすものが存在」(274頁)せず、「何人もの人へと広がりを持っている」(275頁)。ユングの「結婚の四位一体性」の図式においては「基本的には二者関係」(275頁)に留まるのに対して、この作品では「第三者の存在」(275頁)を排除せず重要なものと捉えることで、社会において規定された関係に留まらないあらゆるものが関係しているありようを、登場人物たちの関係を通して示している。

『1Q84』では、リーダーの死の場面を通して「さきがけ」のようなカルト集団が「単純な悪ではない」(279頁)と捉えうる可能性が示された点が「画期的」(279頁)である。一方で『騎士団長殺し』では、「悪や暴力の世界は、架空のものや抽象的なものではなくて、たとえばナチスの暴力や南京虐殺という具体的で歴史的なものになっている」(279頁)点に特徴がある。「歴史的で具体的な暴力」(280頁)の問題が表現されるにあたって、「『騎士団長殺し』の絵」(280頁)を通して「間接的で、芸術的に」(280頁)「暴力との戦いと、自分自身の中の暴力性の自覚の両方」(280頁)が多義的に示されている。

雨田具彦は、彼自身の「スティグマを創造的なものに変えた」(281頁)作家として書かれている一方、主人公の「私」は、免色の肖像画を描き「自分の絵画の新たな可能性を発見」(280頁)した後も、画家として特に変化を遂げることはなく「元の商用の肖像画描き」(281頁)に戻ってしまう。「個人を超えた暴力への取り組み」(282頁)がこの作品の現実には何らか反映されることもなく、「騎士団長殺し」の絵に込められていた暴力の問題は浄化され、白いスバル・フォレスターの男の絵を描いた際に「私」が自覚した自身の暴力性は封印されることになる。「私」が雨田具彦の前で

騎士団長を殺害し、「祠の裏にある地下の石室」（283 頁）に到達したという、死に近接する体験をもって生や肯定への「反転」（283 頁）が生じている。「私」、免色、秋川まりえが共有していた穴は、「私」の妹コミにもつながっており、「無の場所として全ての人に通じている」（284 頁）ものである。この穴がすべてに通じているからこそ、離婚届に判を押して返送させた「私」の別れている妻の元へと戻る動きが作品のなかで生じているのである。

「私」が肖像画を書くことを通して、免色や秋川まりえと交流し共同作業を行うことは心理療法の立場からしてリアリティを有するものである。心理療法において問題とされるリアリティは「象徴性のレベル」（287 頁）であり「普遍性と個別性の意味が交錯する」（285 頁）ものである。騎士団長から「実際に血が出るということが繰り返して強調」（286 頁）されていることや、雨田具彦がヴィジョンのなかで彼自身の「騎士団長殺し」の絵を見ること、夢のなかで「私」がユズと交わることなど、『騎士団長殺し』においては、「象徴性のレベル」には属さない「直接性のレベル」（287 頁）のできごとが題材とされている。

第十四章 『街とその不確かな壁』を夢テキストとして読む

『街とその不確かな壁』では、「現実」の世界と、人びとが影を失って生きている高い壁に囲まれた街とが分かれて存在」（291 頁）しており、そのことは、同一人物である「ぼく」（291 頁等）と「私」（290 頁等）の「解離」や、愛する者を失った過去に由来する孤独な状況と関係している。しかし、その街のなかで「暮らす人たちは、その閉じられた前近代の世界で自己充足して」（295 頁）おり、「永遠の現在にとどまっている」（295 頁）。この作品に登場する図書館の機能や「古い夢」（296 頁）において「内面化」（296 頁）が強調されており、「壁に囲まれた街、図書館にしまわれている夢」（296 頁）は「近代においてこころのなかに内面化されてしまった前近代の世界」（296—297 頁）を表している。

この作品に登場する街は「前近代の世界そのもの」（297 頁）や、「近代意識において内面化されたところ」（297 頁）、「二つの世界に解離してしまっているポストモダンの世界」（297 頁）を表している。本来であればつながることのない「二つの世界の境界を越えて、人と人が本当につながるためには、どこかで直接性の次元が必要」（299 頁）であり、この作品におけるつながりは、「抜け殻の人形が「私」の耳たぶを噛むというマイルドな暴力と直接的なつながりによって生じている」（299 頁）。著者の『村上春樹で出会うところ』（朝日新聞出版、2025 年）において述べられていた、「出会いは何かを共有することで可能に」（300 頁）なるという指摘が改めて確認されており、この作品では「私」と子易さんの「どちらもが 100%の気持ちで愛した人を失ってしまったという物語を共有していること」（300 頁）が重要なできごとであるとされている。子易さんの墓で「私」が語っていた「街」の話が、少年に聞かれることで共有されるように、「私」と子易さんの間での物語の「共有はさらに少年との間にシフト」（300 頁）する。この少年が「実際に「街」に行ってしまう、さらに「私」と一体になって夢読みとなる」（300 頁）ことで、彼らの「共有」（300 頁）は「人と人が本当につながることに到る」（300 頁）のである。この作品では「現実の世界での愛や結合は生じず、また街での関係でも結合は生じ」（302 頁）ず、「現実世界に登場しているはずのコーヒESHOPの女性ともつながることができない」（302 頁）。しかし、「耳たぶを噛まれることで一体となる「私」と少年との間で」（302 頁）「直接のつながり」（302 頁）が発生する。そして、ユングが指

摘するところの「結合と分離の結合」(302頁)のように、「私」と少年との間に「一度つながりができてから、「私」は夢読みの仕事は少年に任せ、自分は現実に戻る」(302頁)。このような「分離を含んだ「結合と分離の結合」」(302-304頁)、もしくは「結合と分離との間の弁証法的な動き」(304頁)の結果として、「私」と少年が一体化することで、「少年は壁を越えて街に入る」(302頁)ことになり、「私」は現実へと戻っていく。

おわりに

本稿は、2025年10月26日(日)にオンラインにて開催された「第49回村上春樹とアダプテーション研究会」で発表した内容を基盤とし、加筆修正を施したものである。以下において、当日の発表にて参加者の方々から頂戴したご意見を踏まえ、本書をもとに考察したことを記す。

本書は、『1Q84』以後の長編についての論考を第十一章以降に取り入れて成立しているため、例えば以下のような齟齬が生じている。『1Q84』における青豆と天吾が「近代意識」を体現する存在として指摘されており、それ以外の作品では同様の「近代意識」の特徴は見られないと著者は述べている。しかし、その後の箇所において『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』にも「近代意識」の特徴は見られると重ねて述べられている。そうした背景には、本書の第十章までが前書の内容を踏まえて構成されており、第十一章以降は本書の刊行に伴って追記されたものであるという事情がある。

稿者としては、第一章ですでに言及したように、著者が心理学の理論や概念を村上作品の読解に適用するようなアプローチは採用しないと明言しつつも、ユングの提唱した「四位一体性」の概念を踏まえて作品読解を試みているという矛盾点があることは指摘したい。また、発表の質疑応答にて、ユング理論を用いて『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』の読解を行っている先行研究への言及がないことも指摘された。

加えて、ユングの「四位一体性」の概念をもとに作品を読解するうえで、「さきがけ」のリーダーとその娘のふかえりとの近親相姦の関係を考察の出発点とすることが妥当であるかどうか疑問を抱いた点を述べたい。ふかえりがリーダーと関わることには、超越性をこちら側にもたらずという意味合いがある一方で、リーダーがふかえりに対して働いた行為は歴然とした性暴力に該当することである。このような犯罪行為がカルト教団を運営するためのドグマとして皮肉にも機能している現実に対して警戒感を抱いているはずの村上の意図が、上記の読解には反映されていないのではないかという指摘がされた。『1Q84』においては幸いにも、青豆に対する天吾の純粋な愛の成達は達成されたが、本来であれば犯罪的な儀式を通して超越性と関係をもつことは危険であり、リーダーとふかえりとの近親相姦の関係を起点とする人物の構図は、「四位一体性」の図式を正確に反映していないのではないかと考えられる。一方で、天吾とふかえりとの超越的な交わりというできごとを経由して、現実において青豆が妊娠へと至る展開は、ユングの「四位一体性」の図式で説得的に示されている。

最後に、先の発表の際に、現役の精神科医の方から貴重なご教示をいただいた。日本に定住している外国人は、日本に移住するまでに身を置いていた共同体から離脱する決断をしたうえで実際の移住へと至っている事情があることから、共同体や親から自立していく際の内面の葛藤が強い傾向にあり、現代の精神医学で定義されているところの社交性不安障害を抱えた場合にも、それを克服

し、新たな環境における希薄な人間関係のなかで生きていくことへの耐性が強いといえる。また、親に反抗するなどして、かつて身を置いていた共同体から自立していく過程は現実の各々のアイデンティティの確立に寄与するものである。もともと共同体に身を置いている感覚が希薄な状態にあることが多い現代においては、自立を遂げていくうえで反抗しうる機会があらかじめ失われている。実際、神経発達症と診断される事例が大幅に増加しているように、自立を果たすうえで欠かせない資質であるはずの主体性が欠如している場合が多いという問題が、本格的に臨床場面において取り上げられる機会が増えているようである。

【付記】

上記の「おわりに」において記したように、本稿は、2025年10月26日（日）にオンラインにて開催された「第49回村上春樹とアダプテーション研究会」で発表した内容を基盤とし、加筆修正を施したものである。席上有益なご指摘を賜った方々に対して、記して御礼申し上げたい。